

# 原子力の海洋活用の勧め HLW 処分場を EEZ 海底下に作れ

## 巻頭言



エネルギー戦略研究会会長，外交評論家

**金子 熊夫** (かねこ・くまお)

外務省初代原子力課長，環太平洋協力日本委員会事務局長，外務省参事官等を歴任。退官後，東海大学教授等を経て現在に至る。

多くの国民が抱いている原子力への不信感の原因はいろいろあるが，その一つは高レベル放射性廃棄物 (HLW) の処分問題が未解決のままであることは言うまでもない。長年原子力が「トイレなきマンション」と揶揄され続ける所以である。科学技術的には深地層処分方法がすでに確立しているとされるものの，現実的に日本で永久処分場がいまだに決まらないのだから批判されても仕方がない。

現在北海道の寿都町と神恵内村に加えて，佐賀県の玄海町が文献調査受け入れを表明しているが，北海道知事や佐賀県知事は消極的態度を明示しており，先行きどうなるか分からない。仮に現世代の地元自治体の首長や議会が受け入れを正式決定しても，そして処分場が実際に建設されたとしても，30年後あるいは50年後地元の対応ぶりが変わるかもしれないからだ。将来当該市町村が経済的に豊かになり生活水準が上がれば，核のゴミ処分場を返上したいという声上がるかもしれない。親世代は受け入れのメリットを認め，積極的に賛成していても，歳月が経つにつれて，価値観が異なる若い世代が拒絶反応を起こす時が来るかもしれない。

結論から先に言えば，筆者は日本の場合，陸地の地下に処分場を作るのは社会的，政治的に至難の業で，不可能に近いと考えている。ならばどうすればよいか。筆者が長年考えに考えた末の答えは，日本の排他的経済水域 (EEZ) 内の海底の地下または EEZ 内にある島を活用することである。これは半世紀以上前から温めているものである。

筆者は 1960 年代末から，キャリア外交官として外務省の国連局科学課 (当時) で海洋開発，原子力平和利用，地球環境問題などを担当していた。1972 年の海洋投棄規制条約 (ロンドン条約) 作成外交会議では日本政府代表として，米国代表と協力し，HLW の海洋処分に関して条約中に「抜け穴」(例外条項) を作っておいた。詳細は拙著「小池・小泉『脱原発』のウソ」(飛鳥新社，2017 年) の P.42~44 に記載した。

簡単にいうと，ロンドン条約の 1996 年議定書第 1 条 7 項で明記されているように，一般的に廃棄物の海洋投棄は禁止されているが，例外的に，「陸上からのみ利用することのできる海底の下の貯蔵所は含まない」ということだ。だから，日本列島のどこかの沿岸地域から海に向かって坑道を掘って，接続水域や EEZ (距岸 200 海里以内) の深海海底下 (深度数百メートル) に貯蔵所を設けることは国際法上十分可能だということである。現にフィンランド，スウェーデンなどはこの方式を採用している。

実は筆者は，1973 年から 4 年半国連環境計画 (UNEP) に初代企画課長として出向していた時，米国マサチューセッツ州の Woods Hole 海洋研究所などに直接行って，深海海底下での処分場建設計画の実現可能性について調査研究を委託したが，その結果報告でも深海海底は地質的に最適であるとのことであった。日本でも，EEZ 内にある離島 (特に南鳥島) は地質的に極めて安定しており，HLW の処分場を作るには最適だという意見を述べている有力な海洋地質学者が少なからずいる。

こうした観点から，筆者は，自ら長年主宰する「エネルギー戦略研究会」(通称：EEE 会議) 内に小グループを設けて「原子力の海洋活用」について研究を行っているが，その中には，廃棄物処分のほかに，海上浮体式原子力発電所，原子力商船建造，海中ウラン捕集，潮力発電などもテーマとして含まれている。

そもそも日本は四方を海に囲まれた海洋国家でありながら，海洋，とくに EEZ の活用という面では極めて遅れている。日本の EEZ (領海を含む) は国土面積の約 12 倍，世界で 6 番目の広さだ。ここをフルに活用しない手はない。東・南シナ海における中国のアグレッシブな活動は決して許されるものではないが，その積極的な姿勢は日本も少しは見習うべきだろう。数十年後 (その時筆者などは鬼籍に入っている) のことを考えて，今からそのような研究や検討だけは進めておくべきだと考えている。

最後に，エネ庁や NUMO が現在進めている処分地選定の取り組みは，わが国の将来のエネルギー政策にとって極めて重要であり，その努力に敬意を表するものである。しかし，廃棄物問題の解決には多角的なアプローチが必要であり，日本の将来を考えれば海底処分場に関する研究・検討も，将来の選択肢の一つとして進めておくことが必要ではないだろうか。関係各位の建設的な議論と協力を期待する。